

- \*サマリヤの女と主イエスが話しておられる時、弟子たちが町で食べ物を入れて帰ってきた。彼らはイエスに食べるようにすすめたが、イエスは、肉の食べ物のことから霊的な食べ物へと関心を向ける。「イエスは彼らに言われた、『わたしを遣わした方のみこころを行い、そのみわざを成し遂げることが、わたしの食物です。』」(ヨハネ4:34) 父なる神から地上に遣わされ、神の国の福音を伝え、もうすぐ行われる十字架と復活のわざを成し終えることがわたしにとっては最も重要な事だという意味である。その「食べ物」の具体的なことは、「永遠のいのちに入れられる実を集める」(4:36) ことである。実を集めること、すなわち刈り入れをする時がすでに来ているので、ぐずぐずせずに、もっと情熱と緊張感を持って人々の救いのために行動しなさい、と弟子たちを諭しておられるのである。それは、今の私たちに対しても言われていることである。
- \*つい最近、「長崎、天草の潜伏キリシタン関連遺産」が世界文化遺産に登録されることになった。多くの血が流された厳しい弾圧の中でも知恵と祈りで揺るがない信仰を持ち続けた先輩たちがいた。宣教師と信徒の文字通り命がけの信仰と種まきと刈り取りがあったのである。テレビで人気の「西郷どん」。西郷隆盛は聖書を読み、教えていたらしいことが明らかになってきた。彼の中心思想は「敬天愛人」。人は天(聖書の「神」と考えられる)に則って道を行うべきである。また、天は人も自分も平等に愛するので、自分を愛するように人を愛することが肝要であると「南洲翁遺訓」に記している。「愛」ということばや思想がまだ日本で知られていない時に、すでに聖書の「愛」をよく理解していた。内村鑑三は西郷のことを「永遠の世界の者」と呼んで敬愛していた。西郷は明治になってから横浜の教会で受洗したと言われている。その後150年以上経った今も日本中で種がまかれ、実を結び続けている。
- \*小さい頃に親に連れられて教会学校に通っていたが、途中で教会から離れてしまった。しかし、ずっと後になって再び教会へ行ってみたいと思うようになり、受洗にまで導かれたという方がおられると思う。種は前にまかれたが、その種は生きていて成長し、後になって実が成ることが多い。「ひとり種を蒔き、他のものが刈り取る」(4:37) のである。それは、「蒔く者と刈る者がともに喜ぶためです。」(4:36) 麦は種を蒔いてから刈り取るまで4か月かかるので、ただあせらないでただ刈り取りの時を待て、ということわざは、信仰の種蒔きと刈り取りには適用されない。実際の刈り入れは聖霊がしてくださるが、畑はすでに色づいているので、常に人の救いのために祈り、私たちにできることをして刈り入れの手伝いができるように願うものである。